



特集

学校生活に生かせる 「書くこと」の指導方法

— 記録文・報告文を中心に —

提言 記録文・報告文登場の意義

大阪教育大学名誉教授 なかにし かずひろ 中西 一弘

「書くこと」の可能性と良さを知らせる
ジャンル

日本の児童が書く作文は、世界に誇ることのできる実に高いレベルにある。が、あまり指導のない、遠足や運動会ばかりの課題では、書き手自ら満足に書けない悩みをいやと言うほど感じさせてきた。過ぎ去った学校行事なので、自分たちの経験ではありながら、なかなか書くことを思いつかない児童がいる。例外ではなく、かなりの数の児童になるのではないか。というのも、もともと児童は、「今」を澆刺と生きているからである。そのような児童にとっては、過去の想起は、指導がないと難しい。その結果、書くことがないという挫折感を味わいながら、無理に字を埋めていくことになる。能力発揮の前に、勝負がついているようなもので、「書くこと」に対して、理由のない苦痛感ばかりが浮き上がる。

このような課題による、「書くこと」への拒否感を「掃するためにも、児童が得意とする現時点に拠点をおいた課題、またはジャンルを提示して、「書くこと」の別の一面を、魅力ある一面を体感させる必要がある。ゆつくりと先生の指導を受けながら、何回も観察をくり返すことによつて、児童は少しずつ気づきを増し、それらを手短に記録していく。これなら、安心して作業が進む。そして、集まった記録を、ある型にはめて書き上げていく。

（左ページ）「仕上げの型」を生かす（参照）
成就感の得やすい「書くこと」が、記録・報告の文章である。これで「書くこと」の印象を「変させていく」。

学習主体が生きる「驚きと疑問」から

学校行事のような共同経験でなく、学習者自身の興味・関心を取り上げて、課題とする。そのため、日頃から、何に「驚き」、どのようなことに「疑問」を抱いているのか、話し合ったり書き出したりしておく。友達との発表に触発されたり、読書やテレビ番組からも見出したりしていく。

「書くこと」の單元では、課題発見へのこの用意がいつも冒頭に記されている。そこを讀んで、取り上げたい課題がすぐに浮かんでくるようにしたい。そのためには、説明文教材や文学教材を学ぶときから、提示されている驚きや疑問の具体的な表し方に注目しておく。疑問文の活用、感動的な指摘、具体例の示し方などの要素が丁寧に示されている教科書教材だから、読むこと、話すことなどの領域をこえ、この「驚きと疑問」を見出す意識を育てる。自分の抱いた問題こそ、解明推進の原動となる。共同経験でないだけに、この課題発見の準備学習は、国語科全体、いや、教科全体の学習成果を左右するはずである。「驚きと疑問」が昔から〈知〉探求

の原点だから。

観点を設けて

目の前にある対象を観察したり調べたりするので、その特徴をとらえることは簡単なようにみえるが、幾通りもあり、どうしてよいか、なかなか難しい。観察し調べる「観点」がなくては、まとまりにくい。

■「命名」(「どうぞよろしく」(一上)の観点から

自分には名前がある。学校にも、クラスにも。これを一枚の紙に書くのが、最初の記録(文?)。自己紹介の名刺だけでは終わらない。学校の教室ごとに名前がある。それを一枚ずつ記入していく、学校の平面図に張っていくと、校内案内図ができあがる。学校探検の報告文も、少し書き足すだけで完成する。教室にある物には、全部名前がある。それを書いていくと、これは無限とでもいえるほどの種類の記録文となる。一枚の紙の「名前」の記録から、報告文や記録文の「書くこと」が始まる。名刺の例から想像できるように、名詞があれば、動詞、形容詞、その他の語句は、無理なく引き出せる。

■「部分」に注目する観点から

「いろいろなくちばし」(一上)も鳥の全体ではなく、その一部分が対象である。どれだけの部分が引き出せるか、そこが調査・観察

の決め手となる。「しらせたいな、見せたいな」

(二下)も、その適用である。「かんさつ名人になろう」(二上)は、部分の、さらに部分の部分を観察していく。その結果が観察記録文となっている。部分といえども、より細部の部分がある。どこまで細かくしていくのか。「たんぽぽのちえ」(二上)で、ただの部分が登場しているか。読みの観点との連続性に留意。「おもしろいもの、見つけた」(三上)も一つのマンホールの部分に着目したものである。

「部分」に区分できると、部分相互を〈比較〉して、共通点や相違点が引き出せ、「時間」の流れでみると、〈変化〉していく姿が鮮明になる。どのように〈変化〉していくかの説明に〈因果〉関係が示されると、よく理解できる。このように、多様な観点をもつことが、調査・観察において決め手となる。

■「観点」を組み合わせ

「アップとルーズで伝える」(四下)で複数の観点を組み合わせることを学ぶ。それを受けて、「生活を見つめて」(四下)では、どのような観点を選べばよいか、その選定から始まる。複数の観点を活用するところから、「部分と全体」、「肯定と否定」、「昔と今」のように、いくつもの観点の要ることが分かる。それらの組み合わせが、調査・観察の正否を決める。

「仕上げの型」を生かす

教材に掲載されている「たいせつ」や、書き方の例を参照のこと。「言葉の研究レポート」(五上)に示されている「レポートの構成」(p40)は、レポートを書くうえでおいに参考になる。「おもしろいもの、見つけた」(三上)には、伝えたい事柄を三つのカードに書いた例が示されている(p42)。「せつめい書を作ろう」(三下)は、日にちごとに内容が分けられている点が参考になる。このような型を与えることで、集まった記録を当てはめて書き上げることができる。

幅広い活用

「言葉の研究レポート」(五上)は、国語科独自の研究対象を取り上げる。どんな課題であれ、言葉についてなら、どこでも可能なレポートができる教材である。が、「言葉の」というところを他のものにすれば、他教科の研究レポートに活用できる。調査・観察という営みは、他教科でこそおいに力を発揮する活動ではないか。その応用範囲の広いジャンルであればこそ、新しい学習指導要領に規定されたのであろう。「メモ」(記録)とあわせて、教育の、学びの基礎能力をなすものである。



生きて働く「書くこと」の力を育む

兵庫教育大学附属小学校教諭

服部 英雄

使用教材「かんさつ名人になろう」(二上)

1 子どもたちが書くためには

子どもたちが、生きて働く「書くこと」の力を身に付けていくためには、次の三つが重要であると考えている。

一目は、「書き慣れさせる」ことである。学校生活、家庭生活ともに、さまざまな書く機会を見出し、子どもたちが鉛筆を持つようにする。そうすることで、子どもたちの「書くこと」への抵抗感を取り払うことができる。

二目は、「書く技術を明確にする」ことである。「書くことは技術である」と言われているように、我々はさまざまな技術を駆使して二つの文章を書く。これは、子どもたちにとっても同様である。子どもたちの実態に応じた「書く技術」を明確にして、きちんと身に付くようにしなければならない。

このとき、教科書教材が役に立つ。各学年の「書くこと」の教材には、その技術が明確にしているからだ。それらをきちんと理解して、子どもたちに指導することで、確かな技術を身に付けさせることができる。

さらに、重要なことは、その技術を対象化して、子どもたちが習得できるようにすることである。例えば、「ひと目見て気がつくことは、どんなことですか。」と教材にあれば、それにしたがって気づいたことを書くだけでなく、その書き出したメモに

「気づきの書き出し」と名前をつけて対象化するのである。そうすることで、ほかの作文のときに生かせるようになる。

三目は、「切実感をもたせる」ことである。これは、子どもたちが自ら書きたいという意欲や、〇〇を伝えるために書くという目的意識などをもちたせることである。

このような切実感をもたせるために、単元の流れを工夫する。例えば、他の教科と合科的に単元化したり、単元をプロジェクト型(文集や劇としてまとめる)にしたりすることである。今回の実践でも、生活科と関連づけながら、最後に「かんさつ文集」をつくる活動を設定した。

2 実践の流れ

単元の流れは、「かんさつ文を書こう」↓「かんさつ文名人になろう」↓「かんさつ文集をつくろう」と設定した。

二目の「かんさつ文を書こう」では、生活科で育てている野菜を観察して、自分なりに気づいたことや思ったことを書くことが主な活動である。子どもたちは、これまでの作文経験を活用して書いた。また、生活科では、継続して観察文を書くようにして、「書き慣れさせる」ようにした。

二目の「かんさつ文名人になろう」では、教科書教材「か

んさつ名人になろう」を読み、書く技術を習得していくことが主な活動となる。ここでは、教材に書かれていることと、自分が書いた観察文を比較しながら、どんな技術が必要かを明らかにしていった。具体的な技術として、次の項目を板書して提示した。

- ・気づきの書き出し
- ・つたえたいことのけつてい
- ・くわしくかんさつ
- ・文をつなぐ

さらに、観察の方法についても「形」「大きさ」「色」「数」「さわる」「におう」「音」など、教科書にまとめてあることを参考にした。そして、それらを「五感を活用すること」と伝え、自分なりの観察文がそうになっているかどうか検討できるようにした。

ここで、重要なのは、教材を読んで理解して、そのあとに書くというのではなく、まず自分なりに書いて、それと教材を比較しながら、子どもたち自らが書くことの技術を見つけていくことである。こうすることで、子どもたちは、自ら技術を発見することになり、書くことの力の育成につながる。

三目の「かんさつ文集をつくろう」では、学んだことをもとに、もう一度観察文を書く。そして、友達と観察文を読み合ったり、自分の最初の観察文と比較したりしながら、学んだことを確かめる。次は、A児の観察文である。

◀ A児の観察文

A児
なすびが、もうとれそう
なぐらい、大きくなりま
した。
なすびが二つ目になって、
大きななすびと、とても小
さななすびがあります。
つぼみがいっぱいできてき
ました。つぼみの中は、白
でした。
早くなすびがしゅうかく
できるといいと思います。

「かんさつ文名人になろう」で学習したことを生かして、作文していることが分かる。特に、『もうとれそうなぐらい』というのは、教材の『大きさは、ビー玉ぐらい』という、程度を表現する技術を活用している。また、つぼみの中まで見ようとしていることも、最初に書いた観察文にはなかったことである。最後に、自分の思いも書き加えている。

このあと、子どもたちが書いた観察文を集めて、冊子にした。それが、「かんさつ文集」である。一方、生活科では、継続的に観察記録を書かせていった。

3 まとめ

以上、生きて働く「書くこと」の力を身に付けるために、教科書教材を活用しながら実践したことを、簡単ではあるがまとめてきた。このように教科書教材を活用すれば、他教科や「総合的な学習の時間」で生きて働く力が十分に身に付く。大切なことは、1でまとめた三つの要素を、どう具体化して指導するかということである。

主体的に様式を学び取り、工夫を生み出す指導

盛岡市立城南小学校教諭 金野 晶子

使用単元「調べたことを知らせよう」(四下)

1 単元構想

単元「調べたことを知らせよう」は、客観的なデータに基づいて考察を深め、論理的に整った文章で自分の考えを主張するための素地を養うことをねらいとしている。

そこで、教材「生活を見つめて」の学習では、まず、「子ども新聞」の記事や、自分たちの生活の中から疑問に思ったことをピックアップして、題材ごとにグループピングする。次に、グループごとに調査項目や調査方法を決めて調査活動を行い、結果を集計して表やグラフにまとめる。そこから分かったことをカードに書き出し、考察しやすいように整理する。そして、分かったことや考察したことを読み手に分かりやすく伝えるために適した構成を学び取り、構成や表現の工夫を加えて調査報告文にまとめる。最後に、学級で「調査報告会」を開き、感想や意見を交流するという学習を展開した。

なお、これらの学習を通して、「生きて働く言語の力を身に付ける」ために、次のような言語活動を設定した。

○取材の段階で、表やグラフという非連続型テキストの読み取りや考察を丁寧に行い、書く必要のある事柄を絞り込む。

○複数のモデルを比較検討することにより、「調査報告文」という表現様式の構成や表現方法を学び取る。

○既習の「初め・中・終わり」という構成を基に、段落の役

に焦点を当て、再調査を行った。その際、インタビューをしたり、本やインターネットで調べたりするなど、既習の調査方法を振り返らせて、調査方法を主体的に選択させた。

(2) 様式を学び取り構成表を作成する

調査報告文の基本構成や表現技法を主体的に身に付けるために、教科書の事例作文「四年組の読書生活」と、市内の小学生の優秀作品を集めた『文集もりおか』に掲載された「お手伝い生活」「外遊び」という二つの作文をモデルとして用いた。

ア 共通点から基本構成と表現技法を学ぶ

子どもたちがこの三つの作文を読んで見つけ出した共通点は次の通りである。これらの共通点から、調査報告文の基本構成と表現技法(よく使われる表現)を学んだ。

【構成と内容について】

- ・「初め」「中」「終わり」の三段落構成である。
- ・「初め」…調べたわけやグループのテーマが書かれている。
- ・「中」…調べたこと・調べた方法・調べた結果・分かったこと・追調査・グラフが書かれている。
- ・「終わり」…まとめ・思ったこと・考えたこと・改善策が書かれている。

【表現技法について】

- 〈書き出しの言葉〉わたしは(テーマの説明)・調べ方は・結果は・その結果・これらのことから(まとめ)
- 〈接続語〉それで・そこで・しかし(予想に反する場合)・また(二つのグラフや考え)
- 〈文末表現〉まとめました・選んでもらいました・順でした・分かりました・思います
- 〈考察で使うキーワード〉予想通り・思いの外・予想外

割と段落相互の関係や効果を考えて構成表を作成する。

2 実践の流れ

(1) 取材・調査結果を考察する

まず、自分が調査する題材について、学級の実態を調べるために、教科書の「アンケート例」や「たいせつ」に書かれている内容を参考にしながら、アンケートを作成した。(資料1)

集計結果は、各自の考察だけでなく、「報告会」で友達のグラフと比較したり関係づけたるために、パソコンを使って同一形式のグラフにまとめた。

グラフから、「分かること」↓

「考えられること」の順に考察をし、それぞれ違う色の付箋紙に書き込み、取材シートに貼って整理していった。(資料2)そこから明らかになった問題点

資料1

「ずいぶん」についてのアンケート!

あなたは、毎日何時間寝ていますか? (うっせんでさい)

☆ A. 5時間ぐらいいねてる

イ. 6時間ぐらいいねてる

ウ. 7時間ぐらいいねてる

エ. 8時間ぐらいいねてる

オ. 9時間ぐらいいねてる

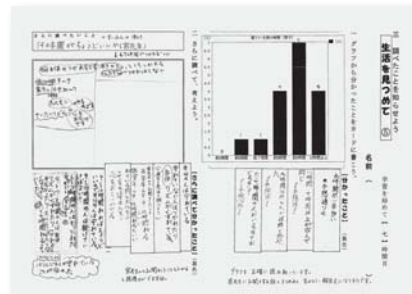
カ. 10時間以上ねてる

お願ひ 記号に丸をつけて下さい。自分の名前を書いて下さい。

ご協力ありがとうございました。

スリープ調査隊

資料2



イ 相違点から構成の工夫と効果を学び、自分の構成を決定する

アで用いた三つのモデル作文の構成表を比べ、その相違点を見つけた。これらの相違点から構成の工夫と効果を考え、各自の構成表を作成した。

《授業記録より》

教師 三つの構成表の違いはどこですか。

児童 「お手伝い生活」は、中の段落が多いです。

児童 二つのことを調べて、グラフも二つなので、結果も分けているんだね。

児童 「外遊び」は、終わりのところが三段落です。

教師 それぞれの構成のよさは何でしょう。

児童 高島さんの構成(教科書p35)37の事例作文)は、シンプルで分かりやすいね。

児童 「お手伝い生活」は、中の部分が詳しいので、説得力があります。

児童 「外遊び」は、自分の考えを詳しく書いているので力強い印象を与えます。

3 おわりに

本単元の学習に入る前までに、第五単元「調べて発表しよう」(四上)において、大まかな構成を考えて調べたことを発表するためのメモを作成した。また、具体的な資料が説得力を生むことも捉えている。これらの学習が、調査報告文の取材や構成の下地となっていた。教科書を丸ごと学習材として扱い、さらにプラスアルファ(開発教材など)を加えることにより、主体的な学習が可能となることを実感した。





報告文が生きて働く力に

新しい指導を考える会

使用教材 「言葉の研究レポート」(五上)

かつて、樺島忠夫氏は本誌で「書くこと」の基本は、『報告』である」と述べられた。(『小学校 国語教育相談室』No.23／一九九八年)新しい学習指導要領で低学年から明示された報告文。系統的な指導はもちろんだが、まずは樺島氏の言う「正確な『報告』の文章を書く能力」を身に付けさせたいと考える。

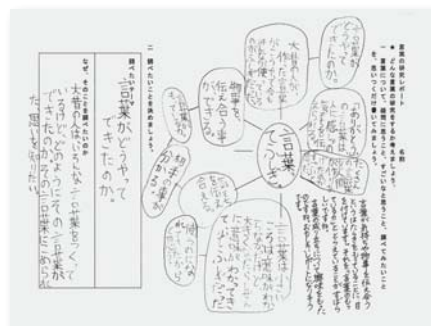
「言葉の世界」を広げ、自らの課題を

正確な報告文には、はつきりした課題が必要である。自らの課題をもつために学級で言葉について自由に思いを広げた。四月から、「ことわざゲーム」や「俳句作り」「漢字博士」などの学習を継続してきたので、言葉についての興味・関心は高まってきたようだった。

その後、「言葉って不思議」というテーマでマッピングをし(資料1)、自分の課題をしぼっていった。日頃から交流している四年生に伝えることとし、相手・目的意識もここではつきりさせた。下の写真(資料2)は、子どもたちから出された気づきや問題を短冊に書き、仲間分けしたものである。友達が言葉についてどのような思いを抱いたのか、どんなテーマにしたのかを交流することができた。

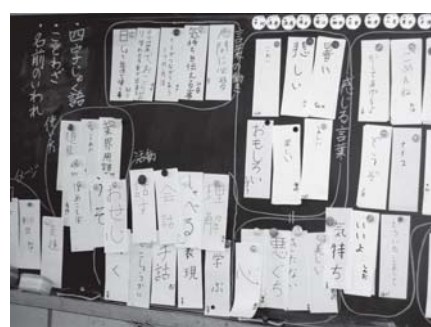
資料1

「言葉って不思議」マッピング



資料2

気づきや問題の仲間分け



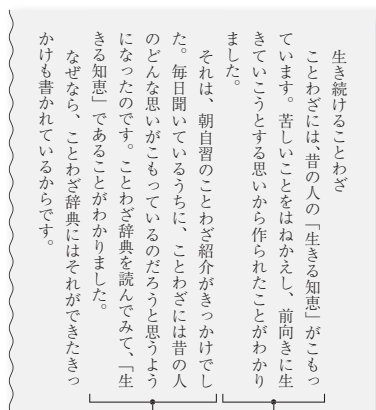
正確な事実と自分の考え

調べ学習では、ややもすると資料の引き写しで終わることがあるので、自分の力で資料を読み解き、思いや考えを自分の言葉で整理することを大切にしたい。そのためには、個に応じた選書の支援が必要となる。ブックリストを作成し、自分の課題に

資料3 調査カード



資料5 「調査カード」(資料3)をもとに考えた文章構成



自分の考え 昔の人の知恵 (それは)	そう思ったわけ (なぜなら)	事例1 苦労をはねかえす ことわざ	(次に)	事例2 相手を思いやる ことわざ	(さらに)	事例3 前向きに生きていく ことわざ	今心ない言葉 (これらのことから)	結論(始めと同じこと)
--------------------------	-------------------	-------------------------	------	------------------------	-------	--------------------------	----------------------	-------------

接続語を効果的に使って文章構成の工夫を

調査カードをもとに、文章構成を考えた。使うカードを決め、事実と感想、意見などを区別するために、色短冊を用いて構成表を作成する。頭括型、双括型の文章をモデルとして示したので、文章構成のヒントになったようである。自分の考えを明確に表現するために、文章構成を工夫しようとする姿が見られた。最終的に尾括型の文章は半分以下だった。

資料4 児童に配布した接続語

- 1 順接型 だから、それで、したがって
- 2 逆接型 しかし、けれど、だが、でも
- 3 添加型 そして、次に、それから
- 4 対比型 むしろ、一方、あるいは
- 5 転換型 ところで、さて、それでは
- 6 同列型 つまり、要するに、例えば
- 7 補足型 なぜなら、ただし、なお
- 8 連鎖型 接続語は用いず、後文で説明
(『新作文指導事典』第一法規 P358参照)

生きる力となる報告文

作文指導に力を入れていた当時の教え子から、「詩や作文などいろいろな書いてきました。が、今、世の中に出て一番必要なのはレポートを書く力です。」という手紙をもらったことがある。樺島氏の「出来事や事実を『報告』する」ということは、情報化時代の人間にとって、どのような文章を書く場合にも大切な技術」という記述が改めて思い起こされた。子どもたちの生きる力となつて役立つことを信じて指導していきたい。